

---

---

# 遊牧と移住のあいだ

## － 20世紀前半期フルンボイル社会の動態から－

中村 篤志

1. はじめに
2. フルンボイル遊牧民の移動を巡る議論と本論の視座
3. シン＝バルガ鑲白旗の社会集団アイマグ
  3. 1. 古老の語りに現れたアイマグ
  3. 2. 大アイマグの分布とその特徴
  3. 3. 小アイマグの分布とその社会的機能
4. 20世紀前半期フルンボイルの政治変動とアイマグ
  4. 1. 20世紀前半期のフルンボイル地域史
  4. 2. 1910-20年代の政治変動とアイマグ
  4. 3. 1930年代の満洲国地方行政改革とアイマグ
  4. 4. 1945年の移住とアイマグ
5. 結びにかえて

### 1. はじめに

モンゴル高原の遊牧民にとって、長距離の移動は、本来生業の中に組み込まれた日常的行為と言える。しかし17世紀以降、清朝の統治下に入ると、自由な長距離移動を阻む境界が、高原の内外に設定されることになる。外には露清間の境界線が引かれ、内にも盟旗と呼ばれる行政単位が作られ、少なくとも法的には、越旗行為は抑止されていた<sup>1)</sup>。モンゴル遊牧民

---

1) 『大清会典（康熙朝）』巻145理藩院・理刑清吏司・軍法条など。ただし飢饉や災害時の緊急避難的越境は認められており（後掲注10など）、実際には越旗行為は頻繁かつ日常的であったと思われるが、他方で、旗内の小集団（オトグ、ノタグ）が旗地を分有する事例（〔ブレンサイン2003〕〔岡2007〕など）や、分有地からの「離脱」を取り締まる事例（〔堀内2013、2015〕）もある。

は、従前より縮小した範囲で、彼我の境界意識を持って暮らすようになったと言える。

清朝が滅亡すると、モンゴルは中国やロシア、日本といった大国の狭間で政治変動に見舞われる。国境や境界が設定されたことで、人々の越境行為が国際関係の中で問題化される一方、中央のコントロールが及ばなくなった「辺境」では、逆に自由な越境が可能になった場合もあった。越境の理由や背景は当然事例毎に異なるため、総括するのは容易ではない。本論の目的は、越境・移住行為そのものの記述ではなく、それら越境・移住を可能にした遊牧社会の構造の解明にある。

個々人レベルの越境と異なり、遊牧民が集団で越境・移住をする場合、当然の如く、その行為は従前の社会組織や社会関係の上に成立する。逆に政治変動期には、往時・平時の史料には現れない遊牧社会の構造とその特質が表出すると考える。そこで本論では、特にモンゴル遊牧民の往時・平時の社会組織に注目し、それが近代の政治変動の中でいかに変容かつ機能していたかを考察する。

対象とするのは、日露中<sup>3</sup>カ国の境界に位置した内モンゴル・フルンボイル地域<sup>2)</sup>である。この地域は清朝が多くの民族を移住させた複雑な歴史を持つ<sup>3)</sup>。なかでもシン＝バルガ(新巴爾虎)<sup>4)</sup>の遊牧民は、後述の如く日常的に頻回移動・長距離移動を行い、1911年以降は多くの政治変動に見舞われ、幾度となく越境・移住を経験した。近代におけるモンゴル遊牧民の越境を考察する上で格好の対象である。

2) 本論でいうフルンボイル地域とは、現在の中国内蒙古自治区呼倫貝爾市に相当する。中心都市はハイラル(海拉爾)で、西方には、名称の由来となったフルン湖(呼倫湖、別名ダライ湖)とボイル湖(貝爾湖)がある(地図I参照)。

3) 現在の民族区分に従っても、蒙古族、満族、達斡爾(以下ダゴール)族、鄂温克族、鄂倫春族、錫伯族などが混在する。清朝は1730年代に諸集団を八旗に編成し、黒龍江將軍管轄下の副都統によって統治させた。八旗制導入や新旧バルガの移住経緯は[柳澤1993、1997、1999]参照。

4) バルガは元々漠北セツェン＝ハン部(現在のモンゴル国東部)から移住してきた。移住時期により新旧に分かれる。シン＝バルガ(新巴爾虎)はフルン湖東西に所領を与えられ八旗(左右両翼各4旗)を形成した(前掲注3、地図I参照)。

地図Ⅰ 東部内モンゴ行政地図



## 2. フルンボイル遊牧民の移動を巡る議論と本論の視座

近代のモンゴル遊牧社会を考察するための重要な資料のひとつが、満洲国下の東部内モンゴルで日本人が実施した社会調査である<sup>5)</sup>。[尾崎 2000] は、これらの調査を精査し、モンゴル遊牧民の季節移動は基本的に一定のルート・範囲で行われるが、状況に応じて複数の選択肢(移動のオプション)を有していたとする。

同様の傾向はフルンボイルに関する日本人調査からも看取できる。[吉田 2002] と [王 2006] に依れば<sup>6)</sup>、シン=バルガ遊牧民は基本的に夏は川辺、冬は高台を営地とすることが多く、例えば左翼 4 旗の民は、夏はウルシュン川やフルン湖の東岸で夏営し、冬は南下してメネンギン=タルやボグド山周辺で冬営する傾向があった<sup>7)</sup>(地図Ⅱ参照)。旗毎に概ね決まった領域があったが、それに縛られることなく、シン=

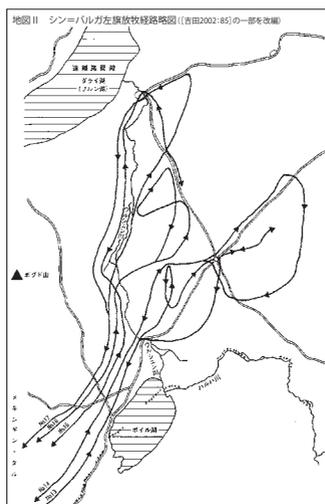
5) 代表的な興安四省実態調査については [吉田1997]、フルンボイルの牧畜調査については [吉田1999a] に詳しい。

6) 両者とも主に興安局調査科『興安北省における牧野并放牧慣行調査報告』1939年に依拠している(筆者は未見)。[吉田2002] は加えて現地出身の古老への聞き取りを行っている。

7) これは[南満洲鉄道鉄道総局1938:27][蒙政部調査科1935:42,挿図]にも記されている。夏を川、冬を山地で過ごすのは遊牧の典型的なパターンのひとつである[吉田1984]。

バルガ全域（南北 200 ～ 300km）を使った季節移動が行われていた。

地図Ⅱ 左旗放牧略図



さらに [吉田 2002:86-87] では、フルンボイル西部が多雪地帯であることから、シン=バルガ遊牧民は年間 40 ～ 60 回もの移動を行い、時に冬営地を設けず冬中移動し続けることがあったと言う。そして、このような長距離かつ頻回の移動は、時に国境を越えて行われた。現在のモンゴル国東部で冬営し<sup>8)</sup>、そこからさらに南下し、内モンゴルの東ウジウムチン（烏珠穆沁）（地図Ⅰ参照）にまで移動していたという<sup>9)</sup>。

しかし、このような越境移動が、1911年以前か以後か、日常的なのかそれとも雪害や争乱からの緊急避難（イレギュラーな越境）なのかは判然としない<sup>10)</sup>。またリスクの高い越境移動を数戸から成るホト＝

8) 越境遊牧は、他に [南満洲鉄道鉄道総局1938:31] や [満鉄哈爾濱事務所調査課1927:119] などにも記されている。

9) 1945年春に同地を踏査した飯塚氏も、バルガの民が外モンゴル経由で内モンゴルのシリングル草原を往復していたとする逸話を紹介している [飯塚1972:213, 226]。

10) バルガとハルハの間には、自然災害による緊急避難の越境を相互に許容する習慣があった [青木2011:349-350] [Хориүчи2016]。

アイル<sup>11)</sup>単位で行っていたとは考えにくい。

〔王 2006:32-49、183-198〕は、シン=バルガ遊牧民が、ホト=アイル（「小群体」）とは別に、20-30 戸ほどの集団（「大群体」）を形成し移動していたとする。王氏は、この「大群体」が、旗下の末端行政組織であるソム（佐領）<sup>12)</sup>を単位に作られたと理解している。一例として、シン=バルガ右翼正黄旗では、旗下の 3 ソムが以下の如く 6 つの集団に分かれており、同様に正白旗や鑲黄旗、鑲白旗でもソム単位の移動集団が存在したとする〔王 2006:34-35、45-46、111-125〕。

第一ソム 第一集団	: 27 戸 184 人
第一ソム 第二集団	: 28 戸 131 人
第一ソム 第三集団	: 39 戸 270 人
第二ソム 第一集団	: 16 戸 94 人
第二ソム 第二集団	: 18 戸 112 人
第三ソム	: 20 戸 123 人

しかし、移動集団が全てソムを単位に構成されていたわけではなかった。〔王 2006:35〕所引の〔井手 1940:34〕では、テニヘ川沿岸の夏営地に居た鑲白旗と正藍旗の牧民 29 戸が、以下のように複数のソム出身者から成っていたという。

正藍旗の宿営地集団:第二ソム 7 戸、第三ソム 5 戸、第五ソム 3 戸、第六ソム 1 戸

鑲白旗の宿営地集団:第三ソム 3 戸、第四ソム 2 戸、第五ソム 7 戸、第六ソム 1 戸

〔井手 1940:41〕は、これらの集団を血縁或は経済的關係など「何等かの関連によってお互いに隣保する慣習を持つところの一つのグループ」と表現し、グループ間で牧地を調整することもあったとする。

また鑲黄旗出身者の回想録〔Duyarjab1995:116〕でも、「長年遊牧を統

11) モンゴル遊牧民が形成する季節毎の宿営地集団で、家畜囲い(ホト)を共有する複数の戸(アイル)から成る。ホト=アイルを対象とした研究は多い〔中村2014〕。

12) ソムは清代に設置された軍事行政組織である。清代モンゴルのソムを巡っては〔岡2007〕〔中村2011〕〔堀内2013〕などの専論がある。

ける内にできた」3つの移動集団が存在し、その3集団は概ね3ソムと対応するとしつつも、集団名が「端の(jaq-a-yin)」「東側の」など遊牧地域によって識別されており、地縁的性格を持つ集団であることがわかる。

いずれにせよ、ホト=アイルよりも規模が大きく(20戸前後の)、必ずしも行政単位(ソム)とは一致しない移動集団(「大群体」「グループ」)が存在したことがわかる。無論、全ての遊牧民が常に「大群体」単位で移動していたわけではない。資料からも、旗内で季節移動が完結している集団や全く季節移動をしない人々の存在が確認できる<sup>13)</sup>。では「大群体」がいかなる目的で形成されたのだろうか。

### 3. シン=バルガ鑲白旗の社会集団アイマゴ

#### 3. 1. 古老の語りに現れたアイマゴ

筆者は以前、フルンボイルのシン=バルガ鑲白旗(köbegeü cayan qosiyu)出身の古老の口述を基に、同旗に存在したアイマゴ(ayimag)<sup>14)</sup>と呼ばれる小集団について考察した[中村2014]。以下その内容に基づきアイマゴについて略述する。

アイマゴについて最も詳細に語ったのはYa. シャーリーボー氏(1910-2009)である<sup>15)</sup>。氏は幼少期を鑲白旗の草原で過ごした後、1927年(17歳)でハイラルに出た。フルンボイル副都統衙門で書記を務めたのち満洲国軍

13) [飯塚1972: 226]は、かかる移動単位の大小や回数の違いを貧富(所有家畜)の差として理解する。すなわち、大量家畜所有者は草地の痛みが激しいので頻回移動を余儀なくされ、貧困者は移動手段の確保すら難しいため移動回数が減少する。後述のアイマゴは、かかる貧困者を富者の移動単位に取り込む一種の救済機能を有していたとも考えられる。なお、このような集団は他地域にもあったと思われる[中村2014: 63]。たとえば索倫旗のオールド族には、20戸程度の冬营地によって識別されるアイル(ayil、部落)があった[吉田2019: 601-607]。後述の地方行政改革の影響も考えられ(後掲注38参照)単純な比較はできないが、今後検討すべき課題である。

14) アイマゴは、清代で「部・部落」と漢訳され、比較的大規模な部族集団を指す(漠北ハルハ四部や漠南のホルチン、ハラチン部など。バルガを部と呼ぶ場合もある)。内モンゴル自治区ではかつての地方行政単位「盟」が「アイマゴ」であり、モンゴル人民共和国および現在のモンゴル国でも、県に相当する広域行政単位が「アイマゴ」である。これらに対し、本論で扱うアイマゴは旗内の小集団を指す。

15) 氏の経歴は[吉田1999b]が詳しい。[中村2014: 53-55]も参照。

に入隊し、1944年春に病気休職で郷里に戻り、翌年8月ソ連の侵攻を迎えた。後述の如く同年11月に約1,000人を率いてモンゴル人民共和国に移住し、移住先で作られたフルンブイル・ソムの初代ソム長となる。日本語・満洲語に長け、後にモンゴル国立大学で教鞭を執った。

以上の略歴から、氏は17歳で郷里を離れるまでと、1944年春から翌年11月の移住の間に、鑲白旗遊牧社会で生活していたことがわかる。さらに氏には、1945年移住後の初代ソム長として移住者全員を登記しソムを運営した経験があり、この経験こそが、アイماغに関する記憶をより鮮明にしていたと考えられる<sup>16)</sup>。

また氏以外にも、1945年に共に移住したLh. アディヤ氏(1921-2002)<sup>17)</sup>からの聞き取り調査、現地シン=バルガ左旗における調査<sup>18)</sup>、さらには現地で編纂された郷土史[Öljei et al.2002]などを比較し、以下のような知見を得た。

鑲白旗には、少なくとも1920年代～1945年まで、アイماغと呼ばれる集団が存在した。シャーリーボー氏が挙げたアイماغは全部で14だが、これらには階層性が存在した。すなわち4つのアイماغ(仮に大アイماغとする)と、その下位の10のアイماغ(仮に小アイماغとする)である。行論の都合上、氏が言う大アイماغにA～D、各々の小アイماغに数字を振り、以下のように整理した。

A ウルジート

B オールジン(別名ウイゼンテン。詳細は後述)

B -1 : ボンホン

B -2 : ボルガスト=ツァガーン

B -3 : エレーン=ボルダラブ

16) 筆者が氏にアイماغの聞き取りをしたのは主に2005年12月と2006年8月で、氏はすでに90歳を超えていたが、特に1945年の移住者については良く記憶していた[中村2014]。

17) 鑲白旗第三ソム出身で、後述の如く1921年にハルハで生まれた[中村2014:55]。郷里の小学校を経て1936-38年に左翼の中心地アムガランの兵学校に、その後1941年からはハイラルで軍医学を学んだ[Мягмарсамбуу2018:213-216]。筆者は2000年8月にドルノド県の自宅で聞き取りを行い、初めて旗内のアイماغについて教示を受けた。

18) 現地調査は2007年、2008年に実施した。郷土史に詳しい現地インフォーマント(A氏)を通じて、70、80代の古老からアイماغの情報を収集したほか、地図などで地名・地形を確認した。

C ホーロイ<sup>19)</sup>

C -1: バヤン=ブルド      C -2: イフ=ノール

D ハイラル=ゴル

D -1: オンゴン=ブルド      D -2: ハナン=ハド

D -3: バガ=オール      D -4: ボル=ホシヨード

D -5: スーデルテン

この内、大アイマグB～Dはアディヤ氏の聞き取りや現地調査でも確認できたほか、郷土史 [Öljei et al.2002:14] でも、鑲白旗社会が4つの「アイマグ」に「区分 (keseg)」されていたとして各々の範囲などが記されている<sup>20)</sup>。これに対し、下位の小アイマグについてシャーリーボー氏のみが語ったものである(ただし現地調査では地名として残っていることが確認できた。詳細は後述)。また、氏が所属するAウルジートは、現地調査では独立した大アイマグではなく、Bオールジン下の小アイマグだったのではないかと言われたが、ひとまず氏の口述に従って分類しておく<sup>21)</sup>。では以下にこれら大小アイマグの分布とその特徴を確認していく。

### 3. 2. 大アイマグの分布とその特徴

まず鑲白旗全体の地勢を [Öljei et al.2002:3] 所掲の地図を改編した地図Ⅲから確認する。この「鑲白旗地図」は年代が不明であるが、次頁に「ガルバル=オール (yalbar ayula) =ソムの地図」が載っていることから、1947年以前の状況を示すと思われる<sup>22)</sup>。

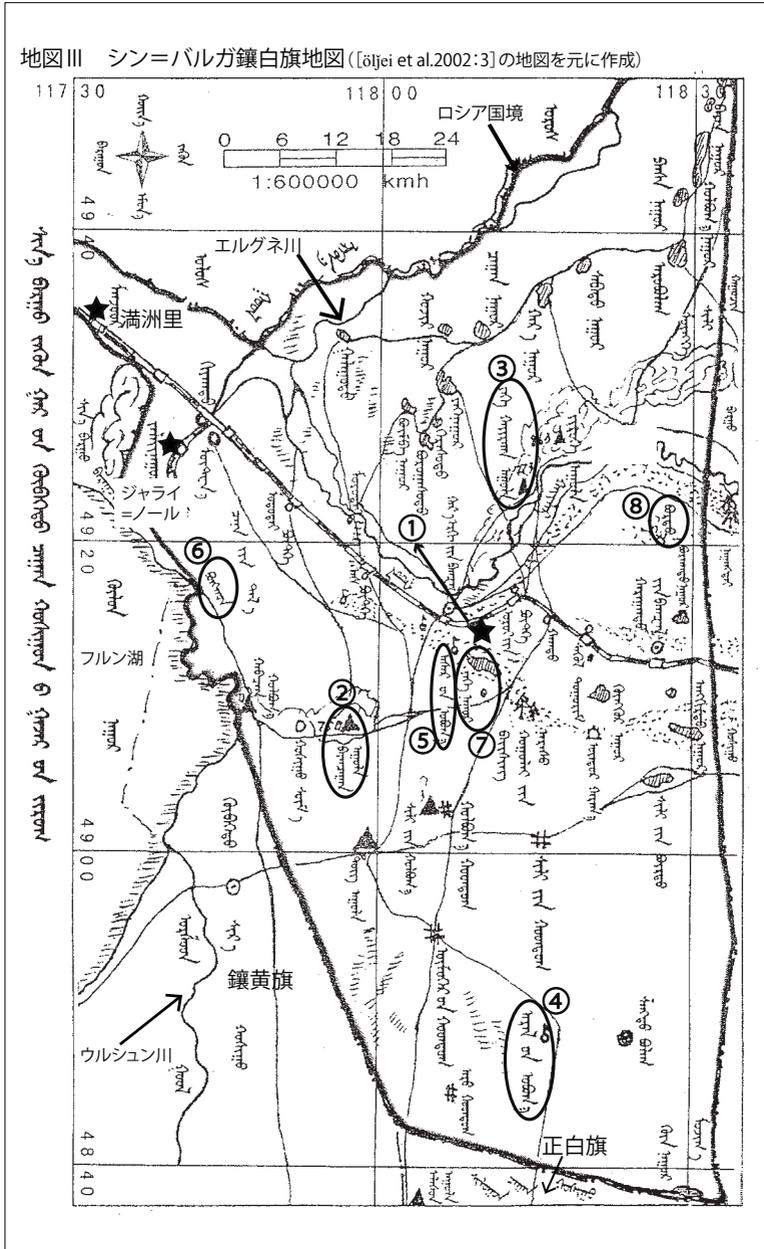
19) ホーロイが示す地形と土地利用については [鈴木・他2018] がある。

20) 同書では「西北 (ウイゼンテン)」、「ホーロイ」の他、「ゴリン」と「東北」の4つを挙げるが、「東北」は「ハイラル川の北、エルグネ川の南」とあり当時この一帯では遊牧できなかった可能性がある(後掲注23参照)。

21) ウルジートがオールジンに包摂されなかった(と氏が記憶している)理由として、自らの所属アイマグの独自性が強く記憶されていた可能性や、後述する1917年の争乱時にオールジンとは別に郷里に残った可能性が考えられる [中村2014: 69注14]。ウルジートには有名なオボーがあったが、1942年に日本がここに要塞を建設し周囲を鉄条網で仕切ったため、オボー祭祀や遊牧ができなくなった [シャーリーボー・他1999: 55] [佐村編1981: 175]。

22) 鑲白旗が「ガルバル=オール=ソム」と改称するのは1947年11月である [Öljei et al.2002: 37]。

地図Ⅲ 旗地区



まず旗の中央には、鉄道（旧中東鉄道）とハイラル川がほぼ平行して東西に走る。旗の北端はエルグネ川（額爾古納河）、ロシア国境に接し<sup>23)</sup>、西端にはフルン湖や炭鉱で有名なジャライ＝ノール（扎賚諾爾）<sup>24)</sup>がある。東部にはハイラル川南岸に平行してハイラルまで続く砂地が広がり、南には鑲黄旗、正白旗さらには前述のメネンギン＝タルへと続く草原が広がる。

旗の中心、ハイラル川の湾曲部にあるツァガーン（察罕、嵯崗、地図Ⅲ①）は、1900年初頭に作られた中東鉄道の駅で、主に漢人が居住し、満洲国時代には国境警備隊も駐屯した〔佐村編 1981：152-153〕。しかし旗民にとって最も重要なランドマークは、旗の西南に位置するバヤン＝ツァガーン＝オール（オールは山の意味。地図Ⅲ②）と、旗の東北・ハイラル川北岸に位置するイフ＝オール（同③）である。2つの山は、標高と特徴的な形により遠くから識別できるだけでなく、両山頂のオボー<sup>25)</sup>は毎年鑲白旗全体で祭祀を行う重要な信仰対象でもあった〔Öljei et al.2002：245-249〕。

鑲白旗は、この2つの山とハイラル川によって大きく3つに区分されるが、実はその3地域が各々大アイマグに対応する。具体的には以下の如くである。

- 1、西南部：バヤン＝ツァガーン＝オールを中心とするフルン湖東岸地域（Aウルジート、Bオールジン）
- 2、東南部：ハイラル川より南の砂地および平原地域（Cホーロイ）
- 3、東北部：イフ＝オールを中心とするハイラル川沿岸地域（Dハイラル＝ゴル）

23) 地図Ⅲでは、鑲白旗の領域はロシア国境まで広がっているが、聞き取り調査ではハイラル川以北での遊牧事実は確認できなかった。〔滿鉄哈爾濱事務所調査課1927：119〕に依れば、鉄道以北は本来豊かな草地であるが、鉄道敷設や、1920年代以降のロシアからの避難民流入などで遊牧が行われなくなっていたと言う。

24) 炭鉱開発は1902年に始まる。詳細は〔麻田2012：286-305〕参照。

25) オボーとは境界や祭祀対象の自然に作られる石積みなどを指す。近代内モンゴル地域のオボー祭祀、特にシン＝バルガのボグド山祭祀については〔吉田2006〕が詳しい。

このような集団区分は、元々の自然地形の差異とそれに伴う遊牧形態の差異によって生成され維持されてきたと考えられるが、その集団意識はさらにオボー祭祀によって再生産されていた。[Öljei et al.2002 : 247]に依れば、イフ=オールは、元々「東北アイマグ」(Dハイラル=ゴル=アイマグに相当)の人々が、隣接するバガ=オール(地図ⅣD-3)と共に祭り、アラル=オボー(地図Ⅲ④)はCホーロイ=アイマグの人々が祭っていた<sup>26)</sup>。Bオールジンは、シャーリーボー氏に依れば、ノゴーン=ハブスガイト(別名ダライ=オール)<sup>27)</sup>を祭っていたという。3つの大アイマグは各々が独自の祭祀対象(ランドマーク)を持っていたことになる。

しかし、大アイマグには、後述の小アイマグのような構成員間の緊密な協働関係は存在しなかった。インフォーマントのアディヤ氏や[Öljei et al.2002 : 14]が、アイマグ名を「西北」や「東北」と呼んでいたように[中村 2014 : 56-58]、大アイマグとは、旗の内部で大雑把に自他の居住地を識別する、一種の符牒のようなものだったとも考えられる。

### 3. 3. 小アイマグの分布とその社会的機能

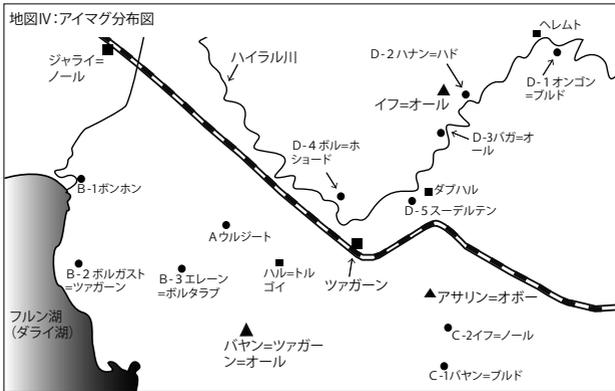
如上の大アイマグが旗全体を区分するのに対し、小アイマグの分布には偏りがあり旗一円をカバーするものではない。現地調査も踏まえ、およその位置を示したのが地図Ⅳである<sup>28)</sup>。結論から言えば、多くが川沿いや湖沼などの水場に集中的に分布している。

26) シャーリーボー氏は、Cホーロイが祭ったのは「アサリン=オボー」(地図Ⅲ⑤)だと述べた。[Öljei et al.2002 : 247]ではアサリン=オボーはソムのオボーで、寺院(duyan,後出アサル廟のことか)が存在したとする(日本人回想録にも「アスロオボ」が登場する[小林2003 : 204])。どちらにせよCホーロイ固有の祭祀オボーがあったことがわかる。

27) 地図上の場所は特定できなかったが、[外務省文化事業部1939 : 10-11]に「ダライ湖畔ノゴンハフサカイト」で省を上げての「盛大なるオボー祭祀」が行われたとあり、ダライ湖畔だとすればオールジンのエリアにある。

28) 小アイマグの場所については、主にインフォーマントA氏への聞き取りに基づく大凡の位置であり、全てを実測したわけではない。

地図Ⅳ アイマグ分布図



例えば、Dハイラル=ゴル (γoul、川) 下の小アイマグは、文字通りハイラル川沿いの両岸に集中して分布している。Bオールジンの内、B -1 はフルン湖岸にあり、B -2 の「ボルガス (柳)」は川辺や水場に生育することからも、その場所が水場であることがわかる。Cホーロイも「ブルド (泉)」と「ノール (湖)」であり、特にC -2 イフ=ノールは地図上で確認できる (地図Ⅲ⑦) ほどの大きな湖である。

一般に非降雪期の遊牧では水の確保が重要で、特に日射が強く高温になる夏は、良い水場があることが夏営地の重要条件である。実際、現地調査でも、これら小アイマグの名称となった土地は水が豊かな夏営地として用いられてきたことが確認された。前述の如く、この地域では冬は頻回移動し一箇所に留まることができないため、夏営地が所属集団を識別する基点になった可能性がある [中村 2014 : 67-68]。

シャーリーボー氏に依れば、この小アイマグは平均 10-20 戸 (最大でも 30 戸程) から成り、遊牧での作業や冠婚葬祭などにおける互助を行っていたという。互助を要する作業は主に季節移動 (negüdel) のほか、干し草 (qadulang) や燃料となるボルガス・石炭 (negüresü) の調達と運搬 (tegegebüri)、失踪した家畜の捜索などであった。これらは個々のホト=アイルで行うより、多人数で広範囲かつ組織的に行っ

た方が効率的な作業と言える。

逆に言えば、これら労働集約が必要な作業以外、アイマグ構成員全員が日常的に集住する必要はなかったことになる。氏は、構成員全員が四季の営地を共にする義務はなく、自らの所属アイマグ以外の土地で遊牧することもできたと言う。所属アイマグの変更も、当該アイマグの共有家畜群（ジャス）に一定の家畜を供出するだけで可能だったという<sup>29)</sup>。構成員が負った義務とは、所属アイマグの集会（qural, yarıłçay-a）に参加することであり、集会では、上述の協働作業や季節移動の実施体制などが話し合われた。

筆者による現地調査では、アイマグの最も重要な機能が、この季節移動、特に冬の移動における互助であったとの証言を得た。前述の如く、フルンボイルは降雪量が多いため頻回の移動が必要であった。シャーリーボー氏も、秋のうちから越冬の候補地を複数下見し囲いや燃料などを整備することが越冬のために重要だと述べたが、現地インフォーマントのA氏は、この冬の移動の様子をさらに詳しく以下の如く語った。

まずアイマグには、「ノタクチン（nutuycin、土地案内人）」と呼ばれる遊牧に詳しく壮健な若者数名がいて、日頃から遠近問わず多くの牧地の状況を把握しておき、冬になると、アイマグの「ダルガ（長、daruy-a）」や「ズブルクチ（jöblegci、相談役、助言者）」らと協議し、天候や牧草の状況などを勘案し移動先を決定する。また、次の営地までの移動順（誰をどの順番で出発させるか）や、ルート上に予め何をどれだけ備蓄しておくかなど綿密に計画・準備した。アイマグ構成員が移動時に守るべき細かい規則（jirum、例えば後続者のために家畜囲いを修繕し燃料の畜糞を集めておくことなど）も定められていたという。

シャーリーボー氏に依れば、小アイマグには、アイマグ内やアイマグ間での利害調整、喧嘩・紛争の仲裁など、行政や司法を補完する機能もあったようだが、氏自身も含めアディヤ氏、A氏とも、アイマグ

29) 実際に変更する例は少なかったようである。氏は、男性は基本的に父親のアイマグに属するため、親戚も同一アイマグ内に多く存在したと述べた。

が、ソムなどの行政組織とは異なる「非公式な組織（qubi-yin jokiyan baiyiyululta）」であることを強調していた。その証左として、小アイマクを率いるダルガには、学歴や血筋、任官歴の有無は関係無く、遊牧生活を円滑かつ安全に行うための知識と経験、そして他者からの信頼があり調整力を有する人物（概ね年長者）が選ばれたという。

以上を要するに、アイマクとは、特徴的ランドマークによって他の集団と識別される一定のエリアを持ち、そのエリア内で居住や生業を共にする集団と定義できよう。地理的要因で結びつく点でこれを地縁組織と呼び得るが、所謂農耕社会の地縁組織と異なるのは、基本的に構成員の移動や牧草地選択の自由が認められていたように、小アイマクには明確な境界線や日常的な束縛が無く、閉じられたテリトリー性が存在しない点である。

小アイマクの本質は、むしろこの開放性・広域性にこそあったと思われる。すなわち小アイマクの機能の中心は、地域内での日常生活ではなく、物資の調達、紛争調停、長距離の季節移動など、自己のテリトリー内では完結しない（完結させると効率が落ちる）問題の解決にあったと考えられる。日常生活における束縛がないのと対照的に、かかる広域的問題を解決する場面（特に越冬）では、構成員はダルガを頂点とする指揮命令系統によって統率されたのがその証左であろう。

では次に、このような社会組織が近代の政治変動にいかに対応したのかを見ていく。

## 4. 20世紀前半期フルンボイルの政治変動とアイマク

### 4. 1. 20世紀前半期のフルンボイル地域史

まず前提となる20世紀初頭のフルンボイル地域史を、バルガの移住問題に関わる事項を中心に概観する。フルンボイル地域には20世紀初頭から、中東鉄道沿線（特にハイラルや満洲里）を中心に、ロシア人や漢人の入植者が増大した。1900年には義和団事件を名目にロシアが満洲に派兵したため、フルンボイル地域は混乱し、シリングルやハルハ

へ逃亡する者が多く現れた。シン＝バルガからも 480 戸が一時ハルハに逃れたが、1902 年には郷里に戻った [Мягмарсамбуу 2018 : 44-50]。

1911 年 11 月に辛亥革命が勃発すると、12 月にはフレー（庫倫、後のウランバートル）でボグド＝ハーン政権が独立を宣言し、各地で内外（南北）モンゴルを統合する動きが活発になった。フルンボイルでは、副都統の勝福が独立・統一運動を主導し、1912 年 1 月 15 日ボグド＝ハーン政権への合流を表明すると、副都統衙門左庁長ツェンド公（成徳公）やシン＝バルガ左翼正白旗章京ダムディンスレンらをフレーへ派遣する一方 [李 1990] [薛 1993 : 159-161] [Мягмарсамбуу 2018 : 58-63]、フルンボイルの軍事的掌握に成功した [麻田 2012 : 329-332]。フレーに到着したダムディンスレンは、その後ボグド＝ハーン政権の軍を率いてホブド解放戦や内モンゴル遠征で活躍し、マンライ＝バートルの称号を授けられた [生駒 1989]。

ところが、1915 年 5 月のキャフタ協定によって、ボグド＝ハーン政権は中華民国の宗主権の下でその統治範囲を所謂外モンゴル地域に限定された。内モンゴルは中国の領土と定められ、フルンボイルも同年 11 月に中国の「特別地域」とされた [橋 2011 : 367-372] [Мягмарсамбуу 2018 : 71-73]。このような情勢下で、ダムディンスレンらはフルンボイルに戻らずボグド＝ハーン政権に合流した（後述）。また、内モンゴル人バボージャブは部隊を率いフルンボイルに拠点を移し一時は勢力を広げるが、最後はロシアの軍隊に敗れた。1916 年に彼が死んだ後も、シプシンゲ率いる残党がフルンボイルに割拠したためハルハに移住する者が急増した [中見 2013a, b] [恩克巴図・他 1994 : 52]。

1917 年にロシア革命が起きると、反革命派セミョーノフは 1918 年から満洲里を拠点として、大モンゴル主義を唱えて諸勢力の結集を図った。同じくロシア革命の混乱を避け、ブリヤート族がフルンボイルへの移住を開始し、最終的にその多くがシニヘイ地域に安置された（現在のシニヘイ＝ブリヤート）[小長谷・他 2014] [フスレ 2015]。

他方、中華民国北京政府は、1919 年 11 月に外モンゴルの自治撤廃

を、翌 1920 年 1 月にフルンボイルの自治撤廃を決定する。これに対し、メルセーらのフルンボイル青年党が武装蜂起（1928 年）<sup>30)</sup> し、さらには中東鉄道をめぐる奉ソ紛争（1929 年）が勃発する〔麻田 2012: 66-67〕など、フルンボイルでは戦乱が相次いだ。

1932 年に満洲国が成立すると、フルンボイルは興安北分省（後に興安北省）に組込まれた<sup>31)</sup>。省長には前フルンボイル副都統の凌陞が任命されたが、彼は 1936 年にソ連・モンゴル政府と密通した罪で銃殺される（凌陞事件）。凌陞の後任として興安北省の省長に就任したのがシン＝バルガ左旗長エルヘムバットであった<sup>32)</sup>。1939 年に勃発したハルハ河戦争（ノモンハン事件）では、シン＝バルガ左旗のアサル廟（地図 C ⑤および前掲注 26 参照）、將軍廟、ガンジュール廟などに関東軍の兵站基地が設けられ、バルガからも家畜や兵士が徴用された〔ミヤグマルサムポー 2013〕。1945 年 8 月日本敗戦後の権力空白期には、フルンボイル自治省政府が作られ、地域政権樹立の道を模索するが〔田淵 2014〕、最終的には中国共産党の勢力下に組み込まれ、現在に至る。

以上のように、フルンボイルは、露中日の狭間で度重なる政治変動に見舞われてきた。そのなかでシン＝バルガの人々はいかに対応したのか、以下に考察する。

#### 4. 2. 1910-20 年代の政治変動とアイマグ

清朝崩壊後のシン＝バルガ住民の外モンゴル地域への越境移住について、〔Мягмарсамбуу 2017: 86-98、2018: 57-257〕〔Өлзий 1999: 58-86〕

30) メルセー（郭道甫、1894-没年不明）については〔中見 2001、2013b〕が詳しい。ダゴール族の知識人で内モンゴルの政治・教育改革に尽力した。青年党蜂起前後の状況は〔周 2012〕〔暁敏 2008〕〔生駒 1995: 275-283〕〔Мягмарсамбуу 2018: 134-161〕参照。

31) 満洲国による東部内モンゴルの統合過程や統治政策については〔鈴木 2012〕参照。

32) シン＝バルガ左翼正白旗第二ソムの出身で、左翼総管を務めた後、満洲国時代に左翼旗長、省長を歴任した〔恩克巴図・他 1994〕。満洲国統治以前からフルンボイルの行政長はダゴール族が独占していた〔暁敏 2008〕が、エルヘムバットは非ダゴール族で最初の就任となった。

を基にその概略を述べる<sup>33)</sup>。それに依れば大規模な移住は4回あった。

第一は、1915年キャフタ協定締結後にボグド＝ハーン政権への残留を決めたダムディンスレンの属下にあった人々で、約87戸340人が、セツェン＝ハン部の一角に旗を与えられ、現在のドルノド＝アイマグのゴルバンザガル＝ソムを形成した<sup>34)</sup>。

第二は1916、17年のバボージャブとその残党による争乱を避けて移住した人々である。鑲白旗、正紅旗、鑲黄旗、正黄旗、正白旗などから相前後して合計912戸4,000人が移住し、一時的にセツェン＝ハン部に居住が認められた。そのうち、正黄旗の官吏らに率いられた240戸1,340人は直接ボグド＝ハーンのシャビ（活仏の寺領民）になることを希望し認められ、トゥブ＝アイマグのアブダルバヤン付近に居住した。

第三は、1928年のフルンボイル青年党の蜂起を避けて移住した人々である。正白旗、正藍旗、鑲白旗、正黄旗などから200余戸が移住し<sup>35)</sup>、一時ソムを形成するが、その後解散させられた。

第四が、前述1945年11月にシャーリーボー氏らが率いた約1,000人の移住である。これらの民は、現在のドルノド＝アイマグのフルンボイル＝ソムを形成した。

以上の越境移住のうち、最大の移住者を出したのが二番目の1916、17年の争乱である。多数のバルガ人移住者を巡っては、1921年からモンゴル人民政府とフルンボイル副都統公署の間で協議が開かれ、1923年には帰還を望むバルガ人を自由に帰還させることなどが決定した〔青木2011：347-350〕。この協定を機に、シャビとなった一部を除き大部分のバルガ人は郷里に帰ったと考えられる。

33) 1911-49年の内モンゴル各地からの移住については〔フスレ2012〕参照。なお外モンゴルからフルンボイルへ移住する例もあった。1939年にシン＝バルガ鑲藍旗には多くの移住者がいた〔外務省文化事業部1939：13〕。

34) 〔Мягмарсамбуу2017：87〕。ダムディンスレンおよび次の第二の移住については〔橋2011：374-385〕に詳しい。また、同時期にシン＝バルガ鑲紅旗の章京で1912年にフレーに赴きボグド＝ハーン政権で外務副大臣などを務めたボンツァグラブダンが、属下20余戸を率いて移住したが、その後は不明である〔Мягмарсамбуу2017：86-88〕。

35) 〔Мягмарсамбуу2018：161-162〕では移住者は計191戸652人だった。

この1916、17年の争乱では鑲白旗からも91戸690人が越境移住したという [Öljei et al.2002:419]<sup>36)</sup>。この数は、後述1938年の統計から考えて、旗民のおよそ3分の1に相当する。そして、この時越境し後に帰還した鑲白旗の集団が、前述のBオールジン=アイマクを形成したと考えられる。

このオールジンは、鑲白旗のアイマクのうち、唯一ウイゼンテン（ウイゼンの）=アイマクという人名を冠した別称を持っているが、シャーリーボー氏は、その理由を、元々オールジン山近くの遊牧集団が、ウイゼンに率いられ「巳年の4つの戦争」を避けるために越境避難し、7～8年後に故地に戻ったからだと述べた。「巳年」とは争乱が起きた1917年を指し<sup>37)</sup>、7～8年後とはまさにモンゴル人民政府との間で協定が結ばれた時期に当たる。

オールジン出身のアディヤ氏も、自身が1921年に現在のモンゴル国東部で生まれたと述べたが、この年は、まさにウイゼン率いる集団が移住していた時期に重なる。以上から、1910年代の移住がアイマク単位で行われ、その移住によってさらに集団意識が強固になっていた可能性が考えられる。

#### 4. 3. 1930年代の満洲国地方行政改革とアイマク

以上の越境移住以外にもアイマクが社会の基層を形成していたことを伺わせる事例がある。1932年、フルンボイルは満洲国の統治下に入ると、地方行政制度を再編されることになった。特に大きい改革は、従来の旗をノタク（努図克、nutuγ）に改める1936年の制度改革であり、シン=バルガ左翼では、従前の4旗を以下の如く東西両ノタク、各6ソムに再編した [哈豊阿1941:34] [Duyarjab1995:5]。

正白旗→西ノタク第1、2、3ソム

36) [Мягмарсамбуу2018:80] に依れば、この時の鑲白旗の移住者は88戸800人とする。

37) シン=バルガではこの戦乱を「丁巳年の乱（動乱）」と記憶している [達喜僧格1985:42-45] [都嘎爾扎布2008:13-16]。

鑲黃旗→西ノタク第 4、5、6 ソム

正藍旗→東ノタク第 1、2、3 ソム

鑲白旗→東ノタク第 4、5、6 ソム

さらにソムの下に、凡そ 30 戸毎にトスゴン (tosyun、村) を設置するよう命が下された。[Öljeimorutu1985 : 39-45] [Duγarjab1995 : 5-6] に依れば、トスゴン設置の命は、1936 年秋に興安北省長エルヘムバットによって布告され、左翼の各ノタクで協議を開始し、1938 年 4 月には各トスゴンの長や戸口家畜数が提出され、省公署に報告された。

このトスゴン体制は、翌 1939 年のノモンハン事件 (ハルハ河戦争) によって宙に浮き、社会レベルでは機能しなくなったという<sup>38)</sup>が、注目すべきはトスゴンの数と設置までの早さである。本来 12 ソムから成る左翼で計 66 ものトスゴン (鑲白旗 3 ソムの下に 12 のトスゴン) が、下命からわずか 1 年余りで作られたことになる。

[Öljeimorutu1985 : 39-45] は、トスゴン設置の意図自体は、当時の状況やバルガ遊牧民の特質をよく考慮していたと評価し、1936 年秋のエルヘムバットの以下の布告を引用する。そこには

「自分たちの希望に従い、ひとつの土地・水場に慣れ親しんだ隣戸の如く集まれば、その土地の名を以てトスゴンと名乗り、住地 (sayurisil) を定めるように。互いに利となるよう、家畜を合わせ見張り・放牧を交代で行うなど互いに助け合い、労働を効率化し (kümün kücü-ben tokirayulju) … 遊牧を向上させるように。」

とあり、遊牧民の自発的な地縁的結合を基礎とし、労働の効率化を目指すよう説いている。そして、このような地縁的結合に基づく互助と労働の効率化こそ、まさに小アイマグの性質そのものであり、結論を先に言えば、実際、鑲白旗のトスゴンは小アイマグを単位に編成され

38) 実際シャーリーボー氏はこの改革の存在自体知らなかった。ただし [Түмэн2015 : 45-46] は、トスゴン中心地に家屋が建てられ、干し草や物品の保管庫さらには学校として機能していたとする。索倫旗オールドでも、同じ1937年 (恐らくこの行政改革の一環として) 固定家屋40戸ほどが建てられたという [吉田2019 : 604]。

ていたのである。以下、具体的に検証していく。

鑲白旗 12 トスゴンについて、村名・村長名・戸口家畜数等を記した表が二つ存在する。一つは [Gereltü1997: 429-430] (以下、表 A) で、一つは [Öljei et al.2002: 33-36] (以下、表 B) である。2006 年までのシャーリーボー氏への聞き取りは表 A を基に行った(当時表 B は未入手)。氏は、表 A の村名には首をかしげる所もあったが、村長の名前とその所属アイマグについてはほぼ記憶しており、そこから村名と小アイマグ名とを結びつけようと試みていた。そして、後日入手した表 B を見ると、氏の口述内容や現地調査で得た知見と符号する箇所が多く、トスゴンと小アイマグとの対応関係がほぼ証明できるに至った。やや煩雑であるが以下に考証する。

表 A と B を対照したものが以下の表「鑲白旗 12 トスゴン対照表」である。表 A の「？」は氏への聞き取り時に氏が「定かではない」と述べた箇所(それ以外は全て氏が断言した箇所)である。

表：鑲白旗 12 トスゴン対照表

(1) 東ノタク第四ソム(鑲白旗第一ソム)表A

	村名	村長	戸	口	家畜計	補注(表Aはシャーリーボー氏の聞き取り、表Bは書中の注記)
①	oγurčuy (オールツォグ)	dandar	25	125	6,348	B オールジン。読み書きできる。
②	öljeyitü (ウルジート)	sodnam	27	155	5,689	ソノムの誤り。Aウルジート。元アイマグのダルガ(長)だった。
③	altan dabusu (アルタン=ダブス)	ukiyabuu	23	107	875	ハイラルのD-4ボル=ホシヨード?
④	jiryalangtu (ジャルガラント)	dasinamjil	22	128	5,965	元官吏(hafan)。ハナ=オールの裾。ハイラルのD-2ハナン=ハド
	計		97	515	18,877	

表B

①	oγurčuy	jangjinbuu (dandar)	25	150	6,348	sir_a usun-u qoγulai-yin aru daki keseg bulduruu
②	öljeyitü	sonom	27	182	5,689	čayan-u barayun qoyitu bey_e-yin qamuγ-un qoyitu üjügür-ün manggan
③	üreltu (ウレルト)	q a s - u n balдан	23	130	875	baya aγula-yin barayun bey_e-yin qadatu qosiyu ba bartay-a

④	jiryalangtu	dasinamjil	22	151	5,965	yeke aγula-yin jegün emüneki ündür qada-tai aγula
	計		97	613	18,877	

(2) 東ノタク第五ソム(鑲白旗第二ソム)表A

⑤	dabqur (ダブハル)	mingγanbayar	33	154	12,868	元領催(boşuγu)。ハイラルのD-5スーデルテン
⑥	bayartutöküm (バヤルトトゥフム)	sengdenqandu	30	161	15,082	元領催。別名バヤン=ブルド。ホーロイのC-1バヤン=ブルド
⑦	dabqur dalang (ダブハル=ダラン)	kükingtei	15	140	5,497	元領催。オールジンのB-1ボンホン
⑧	ügegütü (貧戸)	—	1	8	696	
	計		89	463	34,143	

表B

⑤	dabqur	mingγanbayar (deke boşuγu)	33	154	12,918	següdertü-yin jegün bey_e-yin dabqur bartaγ_a
⑥	bayan töküm	sengdenqandu	30	161	15,082	bayartutöküm geγü baib.
⑨	bongqun (qar_a naγur) (ボンホン(ハル=ノール))	kükingtei (čengden)	33	188	17,501	kölün dalai bolon ürgen γoul-un aγuljar bolqu γajar-un öndürlig
⑧	ügegütü	—	1	8	696	qosiγu yamun-du alba-tai kömün-ü ger büli
	計		97	463	34,143	

(3) 東ノタク第六ソム(鑲白旗第三ソム)表A

⑨	qar_a naγur (ハル=ノール)	po si gu duu	33	188	17,501	不明。
⑩	büridü (ブルド)	wangčing	31	174	20,966	元領催。ハイラルのD-1オンゴン=ブルド
⑪	keremtü (ヘレムト)	sangjiaγat	31	170	15,985	サンジャーハンドの誤り、元領催。ハイラルのD-2ハナン=ハド?
⑫	qurγulji (ホルゴルジ)	γayaγatu	24	114	7,871	Bオールジンのハル=トルゴイのことか。
	計		119	646	62,323	

表B

⑩	büridü	šalji-yin wangčing	31	174	20,966	ongγun tal_a-yin barayun büridü
⑪	keremtü	nidwangja-yin sanjaqangtu	31	170	15,985	qayilar γoul-un aru daki činggis-un kerem daki qosiγu
⑫	qurγulji	eregdel-Un γayaγatu	24	114	7,871	qar_a toluγai-yin qurγulji
⑦	domda yangγ_a (ドンド=ガンガー) (dabqur dalang)	kesigtu (ke bičiγeči)	15	140	5,497	qaraγul-un quγulai-yin domda yangγ_a
	計		78	458	50,317	

まず(1)第一ソムをみる。①と②は表A Bではほぼ一致している。③の村長を氏はD -4 ボル=ホシヨードの者だと述べた。表Bの③の注記は「バガ=オールの西側にある岩壁」とあり、現地調査では、ボル=ホシヨードという名の旧採石場が、注記通りバガ=オールの西側にあったことがわかった(地図IV D -4)。④について氏は「ジャルガラント」がハナ=オールの裾(engger)にあり、村長はD -2 ハナン=ハドの者であると述べた。現地調査では、ハナ=オールが、ハイラル川に向かってまさにゲルの壁(qan-a、ハナ)のように半円型に広がり、その山がハイラル川に交わる東西二つの端に、東西両ジャルガラントと呼ばれる特徴的な岩(qada、ハド)が存在した(地図IV D -2)。

次の(2)第二ソムについて、氏は⑤ダブハル村の村長をD -5 スーデルテンの者だと述べたが、表B⑤の注記にも、ダブハルがスーデルトと近接しているとある。現地調査でも両者はハイラル川南岸の近接する地名であることがわかった(地図IV D -5、ダブハルはその北東)。⑥バヤン=トゥフム(窪地)については、氏が別名をバヤン=ブルド(C -1)だと言い、村長もC -1 出身者だと述べたが裏付けはできなかった。

⑦ダブハル=ダランは、表Bでは同名の村が(3)第三ソムの4番目に記されている(戸口家畜数も完全に一致する)。ただし村長名が表A「kükingtei」と表B「kesigtü」で異なっている。氏はkükingteiがオールジンのB -1 ボンホンの者だと述べたが、実際、表Bでは第二ソムの3番目(⑨)に「ボンホン(ハル=ノール)村」の村長として登場する。すなわち、氏の記憶と表Bの記述に従うならば、⑦ダブハル=ダラン村は、村長 kesigtü で、注記「ハロールのホーロイにある…」とあるようにCホーロイ=アイマグに対応し、⑨ハル=ノール村は別名「ボンホン村」で村長は kükingtei、名の通りB -1 ボンホン=アイマグに対応する(ボンホンは地図Ⅲ⑥にも見える)と思われる。その他、公署で雇用した無産家族が1村(⑧)を形成している。

残る(3)第三ソムについて、⑩ブルドの村長を氏はD -1 オンゴン=ブルドの者だと述べたが、表B⑩の注記にも「オンゴン平原の西の

ブルド（泉）」とある（地図ⅣD -1。地図Ⅲ⑧にも見える）。⑪ヘレムト村の村長を氏はD -2 ハナン＝ハドの者かと述べたが、D -2 は前述の通り④に対応する。表B⑪の注記には「ハイラル川の北にあるチンギスのヘレム（kerem、壁）・・・」とあり、現地調査ではハイラル＝ゴルの湾曲部にチンギス時代と伝承される土塁があると聞いた（地図ⅣD -1 より北西）。最後の⑫「ハル＝トルゴイ」は、氏はこれをBオールジンに属すと述べたが、現地調査でもバヤン＝ツァガーン山とツァガーン駅との中間地（すなわちオールジンの領域）にあることが確認できた（地図Ⅳツァガーンより南西）。

以上の考察から、鑲白旗のトスゴントスゴンは小アイマアイマグを単位に作られており、両者の間には対応関係があった。具体的には、Aウルジート②のほか、Bオールジンが3つ（①⑨⑫）、Cホーロイが2つ（⑥⑦）、Dハイラル＝ゴルが5つ（③④⑤⑩⑪）のトスゴントスゴンを形成していたと考えられる。

元々この行政改革は、一村30戸を目安に一律に末端行政組織を増設するという、上からの押しつけられた改革であった。このような画一的改革は、ノモンハン事件が発生しなかったとしても早晚実効性を失ったと考えられる。しかし、トスゴン設置の布告からわずか1年ほどの間に12もの村が編成された事実は、元々社会に何かしらの小規模な単位集団——前述のエルヘムバットの布告に見える「互いに助け合い、労働を効率化」する集団が存在していたことを推測させる<sup>39)</sup>。鑲白旗ではその単位集団がアイマアイマグであった。

#### 4. 4. 1945年の移住とアイマアイマグ

最後に1945年に起きた集団移住とアイマアイマグの関係を見ていく。移住前後の状況は概ね以下の如くである<sup>40)</sup>。1945年8月7日ソ連軍の侵攻

39) 日本側には、フルンボイルの遊牧民がこの集住政策に対し不満を抱いているとの認識もあった〔外務省文化事業部1939：11-12〕。満洲国側の政策意図や社会の反応などは今後の課題である。

40) 以下は主に〔シャーリーポー・他1999〕〔田淵2014〕に依った。

が始まると、鑲白旗の地もソ連侵攻により被害が出た<sup>41)</sup>ため、旗民はシン＝バルガ左翼の中心都市アムガラ（阿木古郎）アムガラ付近まで逃げたという。

その後、前述の如くエルヘムバットらはフルンボイル自治省政府を設立するが、同時期に、モンゴル人民共和国の代表や内務省の官兵がフルンボイルを訪れ、全モンゴルの統一や協調を訴える宣伝活動を行っていた。しかし、9～10月、ヤルタ会談の内容（内外モンゴルの分断統治）が地域社会にも知られるようになり、10月下旬、モンゴル人民共和国派遣官兵の帰国と国境閉鎖の情報が伝わる<sup>42)</sup>と、地域住民には大きな動揺が広がった。

翌11月上旬、鑲白旗の住民を中心とした2,000人ほどが、国境を越えモンゴル人民共和国への移動を開始した。移動中の混乱で半数ほどが途中で引き返し、最終的に約1,000人が移住し、モンゴル人民共和国のドルノド＝アイماغ内に新たなソム（フルンボイル＝ソム）を作ることが許された。シャーリーボー氏はこの移住を先導した中心人物の一人で、後に初代のフルンボイル＝ソム長に選ばれた。

以上が移住の概略である。この1945年の集団移住とその後の行政単位の編成においてもアイماغという集団区分は機能していたと考えられる。[Мягмарсамбуу 2018: 276]に依れば、1945年11月の移動開始時に、鑲白旗の人々は二手に分かれて南下するが、片方は「西北アイماغ」、もう一方が「ホーロイ、東北、ウルジート」の民で構成されたとあり、移動がアイماغ単位で行われたことを示唆する。

このことはシャーリーボー氏の口述によってさらに補強できる。筆者は先に、新ソム設置前後で作られた移住者名簿をもとに、氏から聞き取り調査を行った。氏は、記載された人物（戸主）ほぼ全員の所属

41) 特に鑲白旗は鉄道沿線にあったためソ連侵攻の影響が大きかったと思われる。日本側の状況は[佐村編1981]に詳しい。

42) 10月20日にはモンゴル人民共和国で「独立公民投票」が実施され、これにより南北モンゴルの分断は決定的となった[田淵2002]。共和国派遣官兵が帰国を決めたのは、恐らくこの公民投票の前後だったと思われる。

する大アイマク名(主要官吏らについては所属する小アイマク名まで)や、一部の人間の家族構成や家畜の多寡までを詳細に記憶していた[中村 2014 : 72-79]。

氏に依れば、鑲白旗住民のうち、ウルジートおよびオールジン=アイマクはほぼ全員が移住してきたが、ホーロイおよびハイラル=ゴル=アイマクは一部が残ったという。参考までに先の表ⅡBを見てみると、ハイラルと思われる5トスゴン(③④⑤⑩⑪)は合計967人を数える(旗の人口1,722人の半数以上を占める)が、1946年移住者名簿では256人に止まっており、ホーロイの2トスゴン(⑥⑦)も合計301人に対し、移住者は182人である。調査の時期も主体も異なるため単純な比較はできないが、大まかな傾向としては氏の口述に近い。

また、移住後に新ソムのバグ<sup>43)</sup>を編成する際、第一バグはウルジート=アイマク、第二バグはホーロイとハイラル=アイマク、第三バグはオールジン=アイマク出身者というように、所属アイマク単位でバグを編成したと述べたが、実際に移住者名簿の分析からも裏付けられた[中村 2014 : 65-66]。

## 5. 結びにかえて

以上、20世紀前半期フルンボイル地域における移動・移住の諸相を、シン=バルガ鑲白旗を中心に考察した。

バルガの人々は、清末から1945年に至るまで、およそ10年に一度の頻度で、時に1,000人を越える規模で、ハルハ側に避難・移住を行っていた。その頻度と規模は、近代東北アジア辺境を襲った政治的変動の激しさを物語ると言えよう。

ただし、バルガの人々が越えた「国境」は、清朝統治下で同じモンゴル民族の間に引かれた境界に過ぎず、ハルハへの越境遊牧も清代か

43) バグ(bay)はモンゴル人民共和国における地方行政組織で、ソムの下位に位置づけられる。同ソムは1945年冬の設立当初は3バグで、翌年4バグに増やされた。

ら頻繁に行われていた点 [Хориучи 2016] は注意すべきであろう。ハルハ社会がバルガの越境移動を受け入れることができたのも、前近代から続く関係性、連続性があったからこそと言える。

さらに、鑲白旗では、このような長距離移動を整然と行う集団が社会に存在していた。この集団はアイマグと呼ばれ、概ね 20-30 戸からなる組織（小アイマグ）で、特徴的ランドマーク（おおむね夏营地となる水場）の名を冠し、自他を識別していた。アイマグは、日常的な遊牧単位というよりは、個別の戸やホト＝アイル単位では対応できない（或いは効率的ではない）協働作業や、時に複数回、長距離に及ぶ冬の移動を助け合う集団であった。地縁的結合を軸としながらもテリトリー性や閉鎖性は弱く、広域的問題に組織的に対処するためにリーダー（ダルガ）を中心とする指揮命令系統が存在した。

統一的な集団行動や長距離移動を前提とするかかる組織の存在が、集団での越境避難や移住をスムーズにただけでなく、満洲国の行政改革や、モンゴル人民共和国移住後の新ソム設置のような急激な社会組織の再編への対応も可能にしていた。度重なる越境・移住ができたのも、このような基層構造があったからだと言えよう。

無論、アイマグの凝集力は、近代における度重なる政治危機によって強化された可能性はある。集団としての経験や記憶が強化されていった面もあったであろう。本論のインフォーマントらは、アイマグが公的行政組織とは異なる非公式の組織だと強調したが、「公」が変動し融解しつつあった時代に、それを補完する「私」が変化し重要性を増したことは十分考えられる。時代的変容や地域差などなお詳細な検討が必要なことは言うまでもない。次の課題としたい。

## 【参考文献・日本語（五十音順）】

青木雅浩

2011 『モンゴル近現代史研究：1921-1924年：外モンゴルとソ  
 ヴィエト、コミンテルン』東京：早稲田大学出版部

麻田雅文

2012 『中東鉄道経営史：ロシアと「満洲」1896-1935』名古屋：  
 名古屋大学出版会

飯塚浩二

1972 『満蒙紀行』東京：筑摩書房

生駒雅則

1989 「ジャー・ラマとコブド問題：モンゴル人民共和国形成期に  
 おける民族問題の一考察」『史林』72(3)：435-473

1995 「ダムバドルジ政権下のモンゴル：第一次国共合作とモンゴ  
 ル民族解放運動」狭間直樹編『1920年代の中国：京都大学  
 人文科学研究所共同研究報告』259-301、東京：汲古書院

井手俊太郎

1940 「遊牧地に於ける諸慣行：陳巴爾虎旗の実態調査より」『蒙  
 古研究』2(4)：34-50

岡洋樹

2007 『清代モンゴル盟旗制度の研究』東京：東方書店

尾崎孝宏

2000 「モンゴル牧民の移動ルート選定の安定性：モンゴル国スフ  
 バートル県の事例」『鹿大史学』48：1-28

外務省文化事業部

1939 「満蒙国境紛争下ニ於ケル新巴爾虎蒙古人ノ動向（支那視  
 察報告第八号）」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref.  
 B05016095100、参考資料関係雑件 第十卷（H-7-2）（外務  
 省外交史料館）

暁敏

2008 「近代におけるダフル人の政治活動：そのアイデンティ  
 ティに関する一考察」『中国研究月報』62-2：3-19

小林静雄

2003 『遙かなる黒龍江』東京：有朋書院

小長谷有紀・サランゲレル・ソヨルマ

2014 『20世紀におけるブリヤート人たち：中国内モンゴル自治区フルンボイルにおける口述史』国立民族学博物館調査報告

119

佐村恵利編

1981 『ああホロンバイル』私家版。

シャーリーボー・ナムスライ（吉田順一・青木雅浩・永井匠訳）

1999 「ドルノド=アイマグのフルンバイル=ソム建設の歴史記録（1945-1950）」『日本とモンゴル』98：50-91（原文はШаарийбуу, Я. and Намсрай, Б. 1995 Дорнод Аймгийн Хөлөнбуйр сум уусэж байгуулагдсан тухай түүхэн тэмдэглэл: 1945-1950 он, Улаанбаатар）

周太平

2012 「郭道甫（メルセ）とその時代：1928年フルンボイル青年党蜂起を中心に」田中仁・三好恵真子編『共進化する現代中国研究：地域研究の新たなプラットフォーム』146-163、大阪：大阪大学出版会

鈴木康平・小長谷有紀・堀田あゆみ・篠田雅人・山中典和

2018 「モンゴルにおける宿营地集団の研究－A. D. Simukovの「モンゴル人民共和国の住民の遊牧生活に関する資料（第一部）」論文の紹介－」『沙漠研究』28(3), 229-241

鈴木仁麗

2012 『満州国と内モンゴル：満蒙政策から興安省統治へ』東京：明石書店

橘誠

2011 『ボグド・ハーン政権の研究：モンゴル建国史序説1911-1921』東京：風間書房

田淵陽子

2002 「1945年『モンゴル独立問題』をめぐるモンゴル人民共和国と中華民国：中ソ友好同盟条約から独立公民投票へ」『現代中国研究』11：74-97

2014 「『シンバルガ左翼総管衙門文書』三種（1945年9-10月）について」『東北アジア研究』 18：125-159

中見立夫

2001 「ナショナルリズムからエスノ・ナショナルリズムへ：モンゴル人メルセにとっての国家・地域・民族」毛里和子編『現代中国の構造変動7：中華世界：アイデンティティの再編』121-149、東京：東京大学出版会

2013a 『満蒙問題』の歴史的構図 東京：東京大学出版会

2013b 「メルセー：体制変動期におけるモンゴル人インテリゲンツィヤの軌跡」趙景達・原田敬一・村田雄二郎・安田常雄編『「社会」の発見と変容：韓国併合～満洲事変』（講座東アジアの知識人3）82-98、東京：有志舎

中村篤志

2011 「清朝治下モンゴル社会におけるソムをめぐる：ハルハ・トシェートハン部左翼後旗を事例として」『東洋学報』 93-3：366-342

2014 「フルンボイル遊牧社会における地縁結合：Ya.シャーリーボー氏の口述に現れた“アイマグ”をめぐる」『東北アジア研究』 18：51-79

哈豊阿

1941 「新巴爾虎族の社会制度」『蒙古研究』 3-1：20-40

フスレ（呼斯勒），ボルジギン

2012 「1945～49年にモンゴルに移住した内モンゴル人」フスレ・今西淳子編『20世紀におけるモンゴル諸族の歴史と文化：2011年ウランバートル国際シンポジウム報告論文集』255-282、東京：風響社

2015 「フルンボイル地域におけるブリヤート・ディアスポラ」Mongolia and Northeast Asian Studies Vol. 1 (1)：19-29

ブレンサイン

2003 『近現代におけるモンゴル人農耕村落社会の形成』東京：風間書房

堀内香里

2013 「清代中期以降におけるハルハ・モンゴル旗内の社会関係調

- 整機能について：セツェン汗部中前旗の「離脱」案件を通して『内陸アジア史研究』28：75-100
- 2015 「清代後期ハルハ・モンゴルの旗内行政統治における印務処の機能について」『東北アジア研究』19：59-77
- 満鉄哈爾濱事務所調査課
- 1927 『経済方面より見たる呼倫貝爾事情』哈爾濱  
南滿洲鉄道鉄道総局
- 1938 『呼倫貝爾畜産事情』  
ミヤグマルサムボー
- 2013 「ハルハ河戦争とホロンボイルのバルガ族」田中克彦・ボルジギンフスレ編『ハルハ河・ノモンハン戦争と国際関係』  
東京：三元社：127-136
- 蒙政部調査科
- 1935 『新巴爾虎右翼旗事情』（蒙政部調査科編『調査資料』8）  
柳澤明
- 1993 「新バルガ八旗の成立について：清朝の民族政策と八旗制をめぐる一考察」『史学雑誌』102-3：369-403
- 1997 「清代黒龍江における八旗制の展開と民族の再編」『歴史学研究』698：10-21
- 1999 「ホーチン＝バルガ（陳巴爾虎）の起源と変遷」『社会科学討究』44-2：345-369
- 吉田順一
- 1984 「モンゴルの伝統的な遊牧の地域性」『史滴』5：57-90（再録：2019『モンゴルの歴史と社会』347-382）
- 1997 「興安四省実態調査について：非開放蒙地の調査を中心に」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第4分冊』43：57-71
- 1999a 「日本人によるフルンボイル地方の調査：おもに畜産調査について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第4分冊』45：57-69
- 1999b 「ヤー・シャーリーポー氏の経歴」『日本とモンゴル』99：33-47
- 2002 「遊牧における移動と定着：モンゴル伝統遊牧の立場から」『東北アジア研究センター叢書』6：79-95

- 2006 「近現代内モンゴル東部地域の変容とオポー」早稲田大学アジア地域文化エンハンシング研究センター編『アジア地域文化の構築—21世紀COEプログラム研究集成—』（アジア地域文化学叢書1）255-282（再録：2019『モンゴルの歴史と社会』555-582）
- 2019『モンゴルの歴史と社会』東京：風間書房。

【参考文献・漢語（拼音順）】

- 恩克巴図・額爾根巴雅爾・色爾森泰  
1994「額爾欽巴図先生伝略」『呼倫貝爾盟文史資料』5：51-65  
達喜僧格  
1985「丁巳年動乱」『呼倫貝爾盟文史資料』2：42-45  
都嘎爾扎布, 花賽.  
2008『滄桑歲月』海拉爾：内蒙古文化出版社  
李毓澍  
1990『蒙事論叢』台北：里仁書局  
内蒙古自治区地図制印院編著  
2010『内蒙古自治区地図冊』北京：中国地図出版社  
王建革  
2006『農牧生態与伝統蒙古社会』濟南：山東人民出版社  
薛銜天  
1993『中東鐵路護路軍与東北辺疆政局』北京：社会科学文献出版社

【参考文献・モンゴル語（アルファベット順）】

- Duyarjab, Q.  
1995 Baryu köbegetü sir-a qosiyun-u oyilaly-a, 1734-1948. Qayilar: Öbör mongyol-un soyol-un keblel-un qoriy-a
- Gereltü, B.  
1997 Sin-e baryu jегүн qosiyun-u tosqun-u бүрildүca-yin tuqai bayicaγalta(1939). Sin-e baryu jегүн qosiyun-u soyol teүke-yin material 2: 422-431

Хориучи, К.

2016 Манжийн үеийн монгол дахь нутгийн хязгаар ба нүүдлийн мал аж ахуй: халх баргын шижээгээр. С. Чулуун, Хурц, А. Борисов, Ока Хироки (eds.) Евроазийн нүүдлийн аж ахуй: Түүх, Соёл, Хүрээлэх орчин. CNEAS Reports 22:75-96

Мягмарсамбуу, Г.

2017 Монгол улсын баргууд: Дорнод аймгийн хөлөнбуйр сумын жишээн дээр 1945-1950-иад оны сүүлч. XX зууны эхэн хагас үе ба монголчууд 1: 81-129

2018 Баргын түүхэн товчоон 1734-1960 он. Улаанбаатар: Соёмбо Принтинг ХХК

Öljei,W.and Bodi,S. and Gwangden, A . and Aradnabadzar, A . and Sarangerel,N.

2002 Барγу köbegetü саγан qosiyun (γalbar ayula sumun) -u oyilal γ-a,1734-2001. Qayilar: Öbör mongγol-un soyol-un keblel-un qoriγ-a

Öljeimorutu

1985 Jegün qosiyun-u tosγun bayiyuluγsan ekilelte ba tegüsülte, Sin-e barγu jegün qosiyun-u soyul teüke-yin materiyal 1: 39-45

Өлзий, Ж.

1999 Барга монголын түүх. Улаанбаатар: Содпресс Хэвлэлийн Газар Түмэн, Ц.

2015 Манжго улсын хөлөнбуйрын барга нутаг, Mongolia and Northeast Asian Studies Vol. 1 (1) : 45-50